
虚像の影

下り坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像の影

【Nコード】

N8418Q

【作者名】

下り坂

【あらすじ】

現実世界にはじかれつつある智博は悪夢をよく見る。

憧れ、嫉妬、理想、野望、すべてが彼を苦しめる。彼の悩みは尽きない。

墓前

最近おかしな夢をよく見る。

薄暗い中、誰かがこちらを見ている。暗くて顔が見えず誰なのかわからない。さらに辺りは霧がかかったようにぼやけて曖昧な風景。智博はなぜかひざまずいてその誰かがいる方ばかりに気がいつてしまふ。誰なのか、何をされるのかがわからず気になるもいつもそのまま意識は薄れる。

目覚まし時計が鳴る前に目が覚めた。昨日は帰ってすぐに布団に包まってしまったのを覚えている。とりあえずシャワーを浴びる。頭だけはいつも以上に冴えていた。

昨夜のことを思い出す。急に自信がなくなってしまう心細くなつて、猛烈な孤独感と虚無感に襲われた。昨夜、辺りは春の陽気につられた仕事終わりのサラリーマン達がいつものようにざわついていた。智博ははじかれるように自分の家に逃げ込んだ。そして、現実を忘れようとそのまま眠ってしまった。普段ならばなぜあんな弱気になってしまったのか疑問に思っても良いものだが、今はそうは思えない。なぜならば、智博は薄々、自分の抑えきれない凶悪な弱い部分に気付き始めたからだった。

風呂場から出るとまだ寒さが染みる春先を感じる。ワンルームの小さな部屋を窓側へ足を進める。外を見渡すと生憎の雨模様。スーツに着替えて早めにアパートを出た。アパートの階段下にいつもはいるはずの猫がいない。大家が可愛がっているらしくアパートに住みついている。朝にいつもその猫に何気なく無言の挨拶をすること。些細な日課にしていた。猫は何も反応しないのだがそれはそれで良かった。たまたまそこにいないだけで調子が狂ってしまいそうになる不安と不満が湧いてきそうだった。逃げるようにその場を立ち去る。いつもならば何とも思わないはずなのだが、やはり調子がおかしいようだ。

智博は冷凍食品メーカーの会社に勤めている。仕事はうまくいかなかった。個人的にも、会社的にも、拳句には社会全体までもうまくいっていないと思えてしまうほどだった。それでも智博はうまくいかないなりに、仕事をそつなくこなせているつもりだった。以前はもつと向上心と野望を胸に澆漑にしていたが、今はそれほどもない。そして、この二年でうまく立ちまわること覚えた。今の自分では認められなかったからだ。勿論、力不足は感じている。しかし、智博は自分の才能を信じていた。一向に自分の才能が開かないが、つばみはあると信じていた。

どれだけ、自分は努力してきたのだろうか、それが報われなと思うと腹立たしくて切なくてたまらない。そのうちにそういったフラストレーションを起こさないよう取り繕うことを覚えた。さらに些細なことを大げさに感動したふりをして、満足をわざと感ずるようになっていた。しかしながら、腹の奥底では以前よりも凶悪な弱い自我が形成されていくのを感じていた。報われない活力が行き場を失ってあらぬ方向に向かうようであった。

日も暮れアパートに戻るとまたすぐに眠ろうとベッドに身を投げる。肉体的に疲れていたわけではないが精神が不安定なことを自覚していたから、眠ることで解決しようとした。もしくは忘れたかったのかもしれない。なかなか寝付けずに頭の中ではいろんなことが湧き出て、あやふやな思考が渦巻いていた。いくら経った後、ようやく現実と夢の境がなくなっていた。

今回は前より夢が鮮明になっていた。そこには誰かがいて、智博に何かを訴えていることが曖昧に伝わってくる。まるで責め立てられているような気がして聞きたくない。しかし、訴えてくる内容はどうなのものは以前から薄々気づいていた。これ以上気づきたくないから耳を塞いだ。

…
次の朝、土曜日で休日なのだが、早く寝ただけあって早く起きた。せつかくの休日も全くの無計画でやることがない。時間が無駄にあ

った。ひとまず、外に出る。何も食べずにただふらふらと歩いた。やがて、飽きて家に帰るも正午までまだまだな時間帯。ふと、自分は何のためにここにいるのが、何のために存在するのかわからなくなりそうになった。自分のために頑張ってきたことが自分のためになっていると思えないことがとても悲しい。元々、智博は誰かのために生きているなどとは思わなかった。皆自分自身のために生きている、誰かのために生きていると思うことは自己満足に過ぎない。また、無償の愛と呼べる類のものは、幼少時代にいつの間にか習った道德概念につながっているかもしれない。しかし道德として妄信するのは智博には受け入れにくいものだった。そのような考えの智博は、世間では悲しい考えの持ち主であることをわかっていた。

それからずっと智博は部屋にこもっていた。ますます心の隙間に虚無の悪魔が住みつき始めたようだ。どうも精神が安定しなく、自我を保てない。今まで自分を信じてきた、信じてきたにも関わらず自分がわからなくなっている。もしかしたら信じ過ぎたのかも知れないと疑った。内からこみあげる意識外の認めたくない負の感情が押し寄せる。そのことは恐怖だった。臆病な自分を混乱させるものということとはわかっていいるから。

…

いつの間にかに眠ってしまった。幸い夢は見えていない。どれほど眠ってしまったのだろうか、現在深夜一時。眠気は完全でない。感情のうねりはなくなっただものの、代わりに強烈な虚しさ、寂しさが異常に湧いてきた。誰かと話したかった、頼りたかった、この気持ちを紛らわせたかった。しかし、まだ自分の強がりの部分が残っていた。そもそも深夜に誰に電話をかけたところで迷惑になることはわかる。まだ理性を保っている。

外に出てコンビニ二向かった。雨は止み、生暖かい曇り空で月のない暗い夜だった。コンビニに入っても誰も出てこない。カウンターを横目で覗き込むと店員は奥の椅子に座って本を本でいる。立ち読みをしばらくしたが客は来ない。カウンターを見ると店員は奥に引

つ込んだまま誰もいない。こそこそと店を後にした。光のある方へと向かうもいつもは派手な明かりを灯す街並みは、今は暗く怪しい明かりになっている。智博はまるで別世界へ迷い込んだような心地で歩いていると、同年代か、若干年下の若者の、耳につく陰険なざわめきが聞こえる。通りの向こうの近くにたまって何やら楽しそうだった。楽しそうに見えるがまるで魅力は感じない。またしばらく歩くとビルの合間にホームレスが小汚い服を重ね着して段ボールの上に寝ている。ふと、彼はどんな夢を見ているのだろうと思った。今のその状況を嘆いているのか。もし、智博がその立場になったならば案外幸せかもしれない。ただその境遇を嘆く気持ちだけで心が埋もれるのだから。そんな安易なことを考えた。

ポツポツと雨が降ってきた。傘は持つてきていない。ビルの軒先を借りてしばらく様子を見た。静かに細かい霧雨が視界一面に降っている。すべてが雨に埋もれかき消されていく風景にどこか見とれていた。

誰かが走ってくる足音が聞こえる。バックを傘代わりに頭にかざし、智博と同じように雨宿りのため同じビルの軒先を借りようとしてきたようだ。智博は何もここに来なくても、と思った。彼の方を覗き見れば背丈は同じくらいのスリッ姿の男性だった。土曜日でさらに終電は終わっている時間なので怪しいのだが、智博は気にできなかった。どうしてもよかった、こんな胡散臭い時間に一期一会で出会う人物など。何事もなくこの場面をさっさと立ち去ってほしいと願うばかりだった。

なかなか彼は立ち去らなかった。二人は雨模様をずっと見ていた。雨音が心の底まで染みわたる気がしないでもない。

「まいったなあ。」

彼が呟いた。雨脚は強くなる一方だった。どんどん景色がぼやけて閉じ込められていく。幸い寒さはあまり感じない。

「本当にまいった。」

彼が智博に話しかけるように呟く。智博は警戒心から彼を無視し

た。彼の方を横目で見れば彼は智博の方を向いていることはわかったが、暗くてその顔ははっきりしなかった。しばらく無視していたが視線が嫌だったので

目を瞑って聞こえないふりをした。

「まあ明日は休みだからいいんですけど。」

そうなら、別に言わなくともいいではないか、と心の中で悪態をついた。

「おたくの景気はどうですか？」

智博はうざったいと思った。でもいい逃げ場となる口実が浮かばない。このまま無視しようか、いつそ雨の中この場を逃げてしまおうか、と考えていると彼は次々としゃべりだした。

「しかし、災難ですねえ、あんだ。ストレスばかりためてこんな夢遊病みたいなこととして。なんとかしないと生きていけなくなるんじゃないかい。」

智博は目を見開いて改めて彼を見た。含み笑いをしている彼の顔は智博自分自身だった。

：

気がつくと布団の中だった。夢かと思ったが強烈な現実身があるし、曖昧な日中の記憶のせいでわけがわからなかった。ただもう一人の自分がいたということは恐怖だった。彼が怖い、自分自身を知っているゆえに、また決して逃げるのが敵わないゆえに怖い。たとえ妄想と知りつつも怖かった。

カーテンを開けると朝焼けが残る赤味がかかった美しい空。：今日は日曜の朝なのか？念のため携帯電話のディスプレイで日にちを確認した。日曜日を確認して少しばかり安心して外出の準備を始める。顔を洗おうとキッチンに行くときすぐ横の玄関にとビショビショに濡れた服が脱ぎ捨ててあった。それは夢の中で着ていた服であつた。記憶がどこかですり替わったのかもしれない。いくら思い出そうとしても何が本当かわからない。気にするだけ無駄だと思い込んで、服を洗濯機に突っ込んだ。

今日は大事な予定があつた。大切な友達の命日でその墓参りだった。昔の服を引っ張り出して着替えた。それが喪服の代わりだった。実家の近くに行くのがなんとなく億劫だったがそんなこと言っていられない。駅に向かい電車で進む。進むにつれ懐かしい風景が目に見え、思わず目を細めた。今日が晴れて本当に良かった。憂鬱な気持ちも少しでもまぎれるからだ。降りたホームは風が通り抜けて若干寒い。駅を出ると近くの懐かしい商店街で一番安い花を買った。花屋の隣にあるはずの、確か靴屋だったと記憶している店のシャッターが閉まっている。少し歩いた先に真新しい店舗の携帯電話ショップができていた。時の移り過ぎを感じて寂しくて、そして少し安心した。今までの自分の失態が風化していつていくのがうれしい。一方で楽しい思い出も悲しい思い出、辛い思い出、数々の思い出が徐々に平坦になっていくのを感じる。ただ郷愁の気持ちのみになつてしまふ不思議な思いが胸の中を埋めていつてしまふ。その中で未だ鮮烈に残る、親友との思い出に、はやし立てられるように墓地に向かつていた。

その墓地は田んぼの真ん中にある。早々に代掻きされた田んぼの水面が日差しを反射している。用水路から枝分かれした小さな水路があり、そこからしゃがんで空のペットボトルに水を入れた。

かつての親友の墓の前に着いた。ボロボロのひときわみすばらしい小さな墓だった。

――窪谷家之墓

先程入れたペットボトルの水を墓石にかける。そして駅前ですつと名もわからない不自然に鮮やかな花を添えた。これだけのことのために今日はここに来た。とはいえ、智博にとって重要なことだった。

親友の名前は窪谷瑞貴。高校の時に会った。彼の家は貧しく、また彼は体が弱かった。しかし、頭が良く、誰よりも冷静で温厚だった。智博は瑞貴に人間性に敵う気がしなかった。その才能によく嫉妬した。

高校一年の時クラスが同じだったことが初めのきっかけ。第一印象は不思議な奴、だった。クラスの中で目立たない奴だったが、智博は彼の言動と物腰に惹かれていった。仲良くなるにつれ彼の不思議な魅力にさらに見入られ始めた。明らかに他の同級生とは違う、懐の深さを感じていた。智博は他にいい表現ができない、その不思議な魅力が智博は好きだった。また、彼の性格は常に謙虚でしたたかだと思いやりを忘れなかった。話の真意を見失うことなく、それでいて客観的にものを捉えることができる卓越したものの見方に智博は感心していた。彼の学業の成績も常に上位だった。智博はよく瑞貴に勉強を教えてもらった。そして、その実力に驕ることなく、未熟すぎる自分にでも決して冷たく当たることとはなかった。智博はそんな瑞貴を悔しく思いながら感心しきりだった。憎いくらいに。

しかしながら、瑞貴は常に日陰の人だった。彼の性格や能力はもっと評価されてもいいのではないかと思っていたが、瑞貴自身がそれを望まなかった。自分から陰に行く姿に智博には多少不可解に映った。

彼の家に遊びに行ったことがある。古いアパートに母と二人で暮らしていることは事前に聞いていたが、実際の住まいを見ると予想を超える何とも寂しい住まいだった。智博の実家を比べるとまるで不自由だった。それでも彼は腐ることもなく、暮らしていた。夕食を御馳走になった時に瑞貴の母親に瑞貴の優秀さを語った。もっと評価されてもいい人物だと瑞貴を持ち上げた。母親は微笑んで何も言わなかった。

高校三年の春、瑞貴は突然倒れ緊急入院した。元々の体の弱さが原因らしい。見舞いに行った時は普段と変わらない様子だった。いつものことだと瑞貴は笑っていた。結果的に智博はその笑顔にだまされたことになる。智博は彼の強がりを感じけなかったのだ。その時は一瞬だった。深夜の出来事だったらしい。朝、携帯電話の留守電に瑞貴の母から一報が入っていた。何もかも振り切って、真っ直ぐに病院に向かいと瑞貴は眠るように息をひきとっていた。

あつという間の出来事に呆気にとられた。少し落ち着くと猛烈な悲しみに襲われた。そして泣いた。泣き続けた後には虚しさばかりが残った。彼が残したものは何があるのだろうか。彼の時間は止まった。無情にも世界は進み、彼を置き去りにしていくのだ。智博にとってそれがあまりにも悲しい出来事だった。彼の才能は埋もれたまま活躍することもなく消え去っていく。彼ほどの人物が評価されないままなのが悲しい。もし智博が瑞貴の立場だったら無念で仕方がないだろう。

瑞貴は智博のあこがれでもあった。だが瑞貴の人生にはあこがれなかった。瑞貴にはその魅力と能力を活かしもつと活躍できたはずだった。それを知らずにただ貶し合い、踏み台にしあう、見る目のない連中が表舞台にすることが齒がゆかった。悔しい、やるせない、そして腹立たしい。

それから智博は一層勉強に励んだ。自分を磨き、瑞貴ように有能になるうと努力した。しかし、自分の満足のいく結果と実感はあまりなかった。その思いを胸に今にまで至っていた。

智博は墓前の前に屈んだ。

「瑞貴。俺はお前みたいになれないよ。」

薄々気づいていた。根本的に何かが違うことを。ただ、認めたくなかったのかも知れない。瑞貴の影を追うあまり自分の姿を見つめることを疎かになって、我が身に潜む自分勝手な虚像の産物を盲信していたのだ。

自分を信じていた智博はうぬぼれかも知れない。傲慢かも知れない。しかし、誰の指図でもなく、ただ自分の思うように生きてきた。好きに生きてきたのにも関わらず智博の心は満たされない。もはや何が正しかったなんて全くわからない。

瑞貴になりきることもできないまま、自分自身を偽って自己評価している。彼に対する憧れは自分の何を満たしているのか。そう、智博は瑞貴に語りかけるように止めどなく思った。まるで黙って聞いてくれる瑞貴がいるかのように心の中で話しかけた。

車の騒音が遠くにこだまするだけの中、人の気配に振り返った。

初老の女性がこちらに向かってきている。手には花と風呂敷に包んだ荷物を抱えている。その人は瑞貴の母だということは遠目でもすぐに気づく。互いに目が合い会釈をした。

「立派になって。」

瑞貴の母は目を細めていった。

「瑞貴は幸せだねえ。こないだいい友達に恵まれて。」

智博はその言葉が半ば信じられなかった。私はいいい友達ではなかったのだから、そんなお世辞などいらない。自分の嫌な価値観が咄嗟に頭の中に浮かんた。そして自己嫌悪させた。

「瑞貴が亡くなって悔しいです。」

幾度となく思ったとこだった。

「そうねえ、あの子が生きていたらどんな風に育っていたんだろうねえ。」

確かに興味がある、しかしどうにもならない現実が悲しい。瑞貴の母は屈んで風呂敷から重箱を出し、おそらく瑞貴の好きだったものを拵えた料理を供えた。そして、両手を合わせて、その小さな古い墓を拝んだ。智博は身動きせずとその風景を見ていた。その姿にどことなく強さを感じた。

「智博君、ありがとう。」

「礼を言われることは、していません。」

「亡くなる前にね、この子がよく言っていたの。智博君に感謝しているって。今でもこう墓参りに来てくれている。瑞貴は本当に幸せ者だよ。」

死んでしまつては幸せも何もない、と皮肉がまたも頭に浮かんた。嫌な精神状況であつた。しかし、褒められたのだから、と自分を落ち着かせた。そしてなるべく冷静に皮肉にならないようやわらかい口調で言う。

「死んでしまつては元も子もないです。」

「そうね、生きてほしかつたけど死んでしまつたからね。」

妙に無機質な言い方だった。しかし、やはり瑞貴の母の言葉は力強く感じた。

「瑞貴は智博君のこと羨ましがっていたのよ」

嘘だ、と直感的に思った。羨ましく思っていたのはこちらなのだから。しかし、興味があつたし、少なからず期待した。半信半疑ながら黙っていた。

「『智博は常に前を向いている』って。」

それは、智博には喜んでいいのかわからない褒め言葉だった。

「『だから、心配になる時がある』ってとも言っていたけどね。」

瑞貴の母は智博を振り向いて見上げて微笑んだ。その言葉は智博に重く心に沈んだ。それからしばらくして、立ったままもう一度拝んで、墓を後にした。瑞貴の母は「元気でね」と一言かけてくれ、智博も「おばさんもお元気で」と返した。その社交辞令でさえ智博の心には深く重く響いた。感傷的な心情が智博を多感にしていたかも知れない。

田舎道を引き返していくと後ろ髪を引かれる気持ちになり、何度も振り返った。瑞貴の母はいつ振り返っても身動きせずに同じ墓石の前に屈んでいた。切ない気持ちを引きずって県道の歩道を歩いていった。そういえば当時自転車での道をよく走っていたことを思い出すと郷愁の平淡な思いが自然と湧いてくる。憂鬱な気持ちでいるよりはいくらか良かった。実家に行こうかと迷った。しかし、今回はあまりにも気分が乗らないのでやめておこうと思った。実家に行っても今は安らぐことが出来そうもない。今住んでいるアパートとはそれ程離れてなく、いつでも来れる距離なので、わざわざ立ち寄ることもないと思い、そのまま帰った。

古い手紙

電車で揺られ一人暮らしの住まいに帰る。途中スーパーに寄って夕飯の買い物をした。家について買ってきたものを冷蔵庫に入れ、自炊の準備で米を研いだ。部屋の中は蒸し暑く外より暑く感じる。

今はとにかく悲しかった。己の理想像とはかけ離れた今の自分が悲しかった。方法を間違えたとか、運が悪いとか、タイミングを間違えたとか、そんな簡単な答えで終われない。拳句、自分の理想とは逆行する悪魔が棲みついてしまっているのだ。その悪魔は静かに自分を蝕んでいるのかと思うと恐ろしいし、悲しい。

夜に雑誌を読んでいると電話が鳴ったが話したくなかったので無視した。一応、着信元を確認すると大学時代の友達だった。彼は今日が智博にとつて重要な日だったことは知らない。やがて留守電に切り替わり、単調な声で案内のアナウンスが静かな部屋に響く。電話はアナウンスの途中で切れた。ホッとした自分がいた。

夜が更けて睡魔があらわれる。今日はどんな夢を見るのだろうか。恐怖が冷めた感情に変わり気分を沈ませた。もう安らぎを感じることはできないかもしれない、そんな気がした。

このままではいつか駄目になる、という危機感が嫌でも湧いてくる。どうすればこの状況を打破できるか考えねばならないとは思っている。ただ今は解決の糸口が全く見つからない。

：

夢を見た。

こつもはつきり夢だと思ったことは初めてだった。それには理由があった。自分がもう一人の自分に馬乗りに跨って、一方的に殴っているのだから。普段の智博ならばこのような暴力を振るうことはあり得ない。どれだけ殴っていたのだろう。しばらく殴り続けた。しかし、いくら殴っても気は晴れない、手ごたえもない。そして怖くなる。殴っている自分を見ると不敵に笑って、いかにも効いてい

ない風ににやけながらこちらを見る。殴り止めていつそ逃げようと立とうとしたが立てない。足下がもう一人の自分自身とくつついてゆつくりと融合していく。最早逃げられない。そしてもう一人の自分は智博を抱きしめ優しく智博に囁きかける。

「逃げたつて無駄だよ。君の持つている凶悪な心、臆病な心、君の我儘な心、すべてが私なのだから。君が本当に望む姿が私であることに気づいているんだろう。でも認めたくない。悲しいかな、君は無理をしている。瑞貴には慣れっこない、君は誰でもない、君であつて私なのだから。」

彼の言葉を嫌悪した。でも受け入れたらどんなに楽になるのだろう。そんなことを頭がよぎったところで目が覚めた。

真つ暗な部屋、まだ夜明けは来ていない。智博は汗だくになりながら泣いていた。これからどうすればいいのだろう、そんな悲しさが襲う。

明日も仕事は控えている。救いを見いだせないまま、この苦しみに耐えねばならない。何も考えずにはいることはできない。これから、智博はどうすればいいのだろうかわからない。智博は亡き友へ思いをすぐるよう募らせているだけだった。

それから、心あらずに過ごしていた。悪魔は時折姿を見せる。しかし、心が錆びていくとともに悪魔は優しくなっていく。悪魔に立ち向かうのは疲れてしまっていた。疲れを感じると不思議にもう一人の自分は優しくかった。どんどん自分が自分で亡くなるように感じた。

時に同僚と仕事終わりに酒を飲みながら席を囲んで、たわいのない話をすれば気持ちはまぎれる。だが自宅に戻るとどうしようもない悲しさがあい変わらず襲う。

妥協して今のすべてを受け入れればなんてことはなかった。そう、受け入れてしまえば楽なのだ。何も考えずに今の自分を否定しなければいい。そう気付いたものの敏感で不自由な智博の心は割り切ることができなかった。プライドがあった。しかし、疲れ果てた精神

は何が正しくて、間違いなのか判断する力を麻痺させていった。

ある日、もう一人の自分に体を乗っ取られていく夢を見た。実家にいた頃、家族で行った山の上の鮮やかな思い出。忘れていた風景が思いがけない形で現れる。不思議な喜びが鮮烈な感情になって考えをさらに麻痺させた。そして事態は意外な方向に向かった。吊橋の上で大自然に溶け込んでしまいそんな感覚のまま、奈落へ飛び降りたのだ。同時に目が覚めた、不思議と驚きはしなかった。

憂鬱な気持ちをリフレッシュさせようと長めに休みを取った。予定は水、木、金、土、日曜日と五連休でどこかに行こうと思った。

そして実家に行った。火曜日の夜、仕事終わりにそのまま行ったら急に連絡した時に母は少しだけ驚いただけで昔と何も変わらずにふるまってくれた。父親はまるで気にもとめずそっけなく挨拶しただけで何も言わなかった。早めに風呂に入って、冷蔵庫の中から父親のビールをもらう。父親は智博を見て「様になってきたな」と呟いて、早々に寝室に向かっていった。

自室に入ると少しかび臭い感じがした。無理もない。しかし、母がこまめに掃除してくれたらしく、さっぱりと整頓されている。片付けが苦手な智博にとってこの自室はなじみにくかったが徐々に昔を思い出し、安心していった。

しかしながら懐かしい。この部屋にいた頃の自分は愚かだった。何も知らないのだから致し方ないが、振り返れば愚かな自分が微笑ましい。ベッドに転がるとすぐに眠れた。ここならば悪魔があらわれようとも少しは立ち向かえそうな気がした。

夢は見ずに、すぐに朝が来た。昔のように母が起こしに来てくれた。台所に行く途中に玄関を見ると父が丁度会社に出ていくところで靴を履いている。今日は特別早く出社するらしい。柄にもなく「行つてらっしゃい」と声をかけた。そしてテーブルに自分の朝食があることの有り難味を実感しながら、食事した。やがて、母もパートに出かけて行った。居間に行つてテレビ前のソファに座る。時間がゆっくりと流れていく気がする。ふと、テーブルを見ると自分宛

の封筒が置いてあった。そう言えば昨日の夜に郵便が届いていることを聞いていた。封筒を裏返し、差出人を確認すると「窪谷妙子」と書かれていた。瑞貴の母だった。ハサミで封筒を開けて中を取り出した。折りたたまれた用紙がいくつかあり、開いてみると一番表におばさんが書いた文書がある。

文面には以前の墓参りの礼が始めに書かれ、この街を離れることが書かれていた。そして、瑞貴が生前に書き残した手紙が同封されていた。なぜ今頃になって思っていると文面の後半にはこう書かれていた。

『この手紙は最近引っ越しの荷造りをしている時に物置の奥から見つけたものです。内容を見て驚きました。宛名は智博君でした。また、すぐに渡さないでほしいと添え書きがありました。』

その添え書きのメモも同封されていた。

『もしできることならば智博には何年かした後に渡してほしい。そのためにすぐに見つけられないよう見つかりにくいところに隠した。このまま忘れ果ててしまいかも知れないが、願わくば智博が大人になって社会を歩み始めたときにでも渡してほしい。』

そしてさらに下には手紙が添えられていた。質素な原稿。懐かしい癖字の文字。その原稿に期待を感じ、おのずと心拍数があがった。手紙にはこうあった。

『智博へ』

先に謝らなければならない。この手紙を読んでもらっている頃には俺はもう死んでいるだろうから。何で俺は死ぬんだろ。そう思うとやるせないから、俺は必死に考えないようにしながら、強がっている。いつまで強がれるかはわからない。死への恐怖がとめどなく襲ってくるのが怖くて、強がっては居られなくなってしまいそうなんだ。今は強がってはいるけれど、いつつぶれてしまうかわからない、とめどない恐怖を常に感じながらこれを書いている。

前に智博は俺のことを凄く奴だ、と言ってくれたけど、そんなこととは。俺は大人に言われた良い行いというものをただ機械的に

行っていただけにすぎない。そこに自分の意思はほとんどない。言う通りにしていればとやかく言われる筋合いはなくなるからすしやすかった。そのことがすべてではないが、結果、智博が望むような人になっただけということ言わせてくれ。智博が思う高尚な考えではない。謙虚だと思われることもあるだろうがそれは褒められたり、おだてられることさえ、疎く思っていたからなんだ。

というのも、俺は母さんに迷惑をかけたくないとばかり思っていたから、それが自分自身の個性を知らず知らずに消してしまったのかも知れない。それに一人ツツパって目立つことが怖かった。俺が控え目な性格なのはよくわかっていだろう。そんな俺は自分に疑問を持っていたんだ。殻に閉じこもって、隠れて、そして拳句には自分が無くなってしまうばいいとさえ思っていたこの自分が疑問だった。

智博はそんな俺とは違った。智博には希望がある。夢がある。積極的な向上心に溢れている。俺は智博が羨ましい。智博はいつも前を向いている。自分の成長を常に望む姿がまぶしくて、頼もしくて羨ましかったんだ。

憧れというものはどこか怖い。憧ればかりが先走っていくと特に怖い。智博はどうしている？俺は智博を見ていてふと心配になる時がある。勝手な印象だけど、智博は自我が強い。そして俺は自我が弱い。もし智博が俺を模範にするならばやめた方がいいと思う。俺達は対極に位置しているから。俺は実は、智博のように澁刺と積極的に行動したいと思ったことがある。でも自分の事なかれ主義の考えがどうしても邪魔して、相反発して心の中がおかしくなりそうだった。気持ちと本音がぶつかるんだ。そのうち不安になって自信がなくなり、気が保てなくなるようだった。これは俺だけのことだろうか？智博はどう思っているだろうか。もし、俺と同じ思いならば、俺たちは自分がないものに惹かれあつた仲なのかも知れないな。

俺はこれから死んでいくのだから、もし死ぬならばすべて吐き出して俺の気持ちを残さずに死にたい。墓場まで持っていきたい

ものなんてない。いや、何かを残したいからこうして書いているような気もする。何かを残したい。いや、死にたくないからせめて何か爪痕を残したい。結局そこに行きついてしまう。仕方がない、やはりそれがゆるぎない俺の本音だから。

そして、すぐにこの手紙が渡らずにしばらくして渡って思い出しでほしい。これは俺の我儘だ。すぐに手に渡ってすぐに風化していくのが嫌だという我儘でもあるし、また、自惚れである。これを書き残すことでおせっかいながらも智博のためになればと願って書いているし、また、長く広く最大限のアドバイスをしたつもりでいる。もしかしたらかえって智博を苦しめる内容を書いているかも知れないが、決して悪意ではない。伝えただけだということを言い添えさせてくれ。

最後になるがこれも言わせてくれ。智博は生きていく上でこれから幾多の苦しみも悲しみも訪れるはずだ。でも、悲観しないでくれ、なぜならば生きていく智博が羨ましい。俺は死にたくない、たとえ最低な世の中だろうが、なんだろうが俺は死にたくない。だから俺は生けていける智博が羨ましい。智博の人生は俺が羨ましくんでいるよ。それを忘れないでくれ。たとえ俺が死んで悲しんでくれようがいずれその思いは幾重の新たな思いに包まれ、智博の心にかげがない財産になると、そう祈っているよ。

そして友達でいてくれて俺は本当に嬉しかった。ありがとう。

窪谷 瑞貴」

確かにおせっかいだった、だが心は震えた。感動？喜び？悲しみ？智博にはわからないが心に響いた。その後、徐々に冷静を取り戻していけばいくほど瑞貴の残した言葉は重くなっていく。当時の瑞貴の思いなどまるでわかってやれていなかった。瑞貴が言わなかったからわからなかった、というのではなく、たとえば言われようと当時の智博では理解できなかっただろう。当時の瑞貴は智博の考えの先を行っていたのだ。悔しいがやはり瑞貴は凄い奴だった。その評価はいつまでも変わらないだろう。それが智博の今の気持ちだった。

瑞貴の言うとおり『瑞貴は大したことはない』と思う日が来るかもしれないが、今はとてもそうは思えない。

手紙を閉じて封筒に戻した。予期せぬメッセージは今の智博の心を鮮明に彩った。

手紙を持って二階の自室に戻りカバンにしまった。再びベッドに寝っ転がる。閉め切ったカーテンから光が漏れ、部屋の中を舞い上がる埃を映した。頭の中に瑞貴の言葉がぐるぐるとまわる。

最近よく眠るなあ、と思いながらまたも夢を見ていた。夢というよりは幻覚に近かった。視線をベッドの隣にやると制服姿の自分と瑞貴が立っていた。二人はなにやら真剣な顔で話をしている。懐かしい友の姿。何か伝えなければならぬ衝動に駆られる。制服姿のもう一人の自分も同じ気持ちなのか、何かを訴えている。一方の瑞貴は淡々と返答をしているだけだった。制服の自分が必死になるほどに瑞貴の姿はぼやけていった。やがて瑞貴は消えると制服の自分は膝をついて泣いた。気がついたら寝ている自分も涙を流していた。自分は一体何をしているのだろう。

何も動いてないのに体が激しくだるい。ふと体を起こした。またも気が保てていないことに気づいて体を動かすことにする。カーテンを開けると意外と曇っていた。智博はジャージに着替えて外に出た。

…

智博は堤防を走っていた。結構な時間を走って、やがて疲れて河川敷の斜面に腰かける。中途半端な気持ちで走ってしまった。学生時代の体力ではないことに気づき一旦止めて休憩にする。ジャージの下は結構な汗をかいている。久々にかく健康的な汗だった。曇り空の下、馴染みの風景、いつか、子どもの頃を思い出した。

平日に社会見学で学校の外に出て、滅多に見られなかった平日の新鮮な外の世界を見て、よくわからない感動を覚えていた。その気持ちとはなぜか強烈だった。子どもの頃の鋭い感受性は今や失われつつある。いつからかドライになってしまった。世界はそれほど感動で

きるようなことはさほどない。一つ一つの出来事は本当に大したことではない。一つの出来事をどれだけ飾れるかによる。それを知ってしまいドライになるのは自然であろうか。それともただ自分だけが感動を見つけられなくなったただけだろうか。

今度は走らずゆっくりと歩いていた。何にもとらわれずゆったりと歩くのも悪くない。もともと散歩は好きだった。ふと住宅方面の向こうに見覚えのある人影を見つけた。同級生の兄が女性と歩いていた。彼女か、もしかしたら結婚して奥さんかも知れない。また、同級生は今実家にいるのだろうかと思うと訪ねてみたい気もしていた。それだけのことで多少心が揺れるのを感じた。堤防をさらに進む。どこまでも進もうと思った。

夕方には戻った。ヘロヘロになるまで歩いて、走って、を繰り返して戻った。まだ母は帰ってきていない。そのまま二階の自室に入った。すぐ後に母が返ってきたらしく何やら物音がした。無駄に一階が気になるのを紛らわそうと古い小型のテレビをつけて時間を潰した。

やがて、父も帰ってきた。二階に上がってくる足音がする。ノックをされた。

「智博、いるのか。」

父の声だった。

「おう、いるよ。」

扉は開かれワイシャツ姿のままの父が覗く。

「飯。」

とそっけなく父は言った。それだけ?と思った。

「下から呼べばいいだろ。」

父は表情を変えずに智博の顔を見つめる。

「何となくお前が気になった。」

「そうか。」

「何か隠してないか。」

「いや、別に。」

どこことなく、智博は不安定な心情に踏み込まれなくなかった。

「まあ、飯だから降りて一緒に食べる。」

テレビを消して父の後に続くよう台所まで行く。「いただきます」と言っただけ、特に会話はなかった。母から、会社はどうなの、一人でちゃんと暮らしてるの、と聞かれたが智博はそっけなく答えただけだ。食べ終え、二階に戻ろうとしたが思いとどまってリビングにいた。父は食後にすぐ部屋に戻るのをあまりよく思っていないことを思い出したからだ。久しぶりに湯呑を出してお茶を飲むことにした。

テレビを点けニュースを映す。ソファではなく、傍らの椅子に座る。父が入ってきた。

「窪谷さんから送られてきた封筒を見たか。」

「ああ見たよ。」

「そうか。」

父はいつものソファの席に座る。

「強がってないか。」

急に父は言う。

「何言ってるの。」

「窪谷さんから何が送られたんだ？」

父は話の流れを考えずに話す。知ったかぶったようなその態度が気に食わない。

「墓参りをした時の礼と引越すことが書かれていた。それと俺は強がってねえよ。」

瑞貴からの遺言の手紙のことは伏せておいた。隠すことではないが触れられなくなかった。その点ではもしかしたら強がっているかな、と自覚はあった。

「瑞貴君、もう何年になる。」

「七年。」

「そうか、早いな。生きていてほしかったなあ。お前いい友達だったんだろ。」

「ああ。」

「友達つてのは大事だから。それに本音を話せる友達がいるといないとでは違うもんだ。そんな友達は他にいるのか？」

智博は言葉が詰まった。瑞貴以上の友達はいなかった。それ以外の友達とはさほど親しくしていない。それに友達のことを父に聞かれるのは複雑だった。少し前の子どものおかしな強がりからムキになって言い返したり、相手にしなくなったり、もしかしたら冷たくあたったかも知れない。今は少し人生経験が増えたおかげからか、そんなことはしない。

「瑞貴以上の奴はいない。奴ほどのできた奴 はいないから。」

父は珍しく含み笑いした。

「俺にそんなふうに見える友達はいなかった。」

自分ならば言いにくそうなことをさらりと言った。

「いなくとも昔は世間体が強かったから、その分守られていたし、家族にも恵まれていた。規則も厳しかった。まあ足らない規則はたくさんあったが強烈な世間体があった。それらが通用しない裏側は確かにひどかったが俺は表側にいられた。」

智博は少し驚いた。なかなかどうして理知的だ。

「今はそれほど世間体は強くないから守られてない。その分酸いも甘いも自分自身だ。お前はどうか？今お前を見ると不安だ。勘じゃなくお前を見れば誰でもわかるくらい顔に不安が出ているぞ。」

どうも繋がりにくい話のように智博は感じたが、その真意には気づいていた。また、父からそこまで言われることは意外であった。智博の印象では口数の少ない、厳しい昔気質な人だったので、こうも理知的なことをつらつらと話す人ではないと勝手に決め付けていた。

「そんなふうに見えるのかよ？」

「ああ瑞貴君がいた時とはまるで別人のようだ。それも日に日に変わっていく。なにかに引きずられているようだ？」

「引きずってはいない。問題は別のところにあると思う。」

「それは自分でわかっているのか？解決できそうなのか？」

「…」

智博は黙った。

「話したくなければ別にかまわない。」

父はすぐに引いた。

しつこく聞かれたとしても答えようがなかったのだから仕方がない。何か答えた方が気にされずにすみそうだなとも思い、平静を装って当たり障りのない返答を考えていた。考えている間に父はこう付け足した。

「でも覚えておけ、俺は話してくれば相談にはのる。」

それは普段口数の少ない父の励ましと心配だった。智博は「なんだよ」と思った。ちょっとだけ肩の力が抜けた気がした。

「親父がそんなこと言う奴とは思わなかった」

「俺は話のわかる奴じゃないと相手にしないからな。」

「…それはすごい皮肉だな。」

「俺はお前のお守が苦手だった。」

過去を振り返ると、ああなるほど、と思い当たるようなことがたくさんある。智博は頭を掻いてから立ちあがり「上で休む」と言い残して部屋に向かう。いつものように横になると、いつもらしからぬ興奮と疲労感を感じた。

日記

次の日の朝、思い立って「簡単な旅行に行く」と言い残して家を飛び出すことにした。案の定、母に「どこ行くの？」と聞かれたが正直決まっていなかった。「前に行った山」とちよつと前に見た夢を思い出して言い逃れた。特に両親は何も言つてこなかった。元々両親は放任主義なところもあつた。その後、出まかせで口に出した「前に行った山」に不思議にも実際に行つてみたくなつた。

家から携帯一式と替えの下着だけを持つて、まずは電車に乗つた。下り電車は学生だらけで騒がしい。どこに行けばあの場所にたどり着く見当がつかない。詳しいことは覚えていなかった。漠然としたイメージだけで進む。だがそれがいい。車両の中で座ると睡魔が襲う。目をつぶつて思い出を馳せ、今の自分を振りきつて、古い記憶に飛び込む。ふと思い出は感情揺れた時にできるものだ、と思つた。思い出は作るものではなく受動的にできるもの、そう思えば良くも悪くも今を生きる意味を見いだせそうだった。すこしばかり心を安定させた。

ウトウトしていたら、随分遠くにきた。いい具合に緑が溢れている。やがて宿泊先を心配した。出る時にはビジネスホテルにでも泊まればいいと思つたが、こうも窓を流れる田舎景色が続くとでは期待できない。泊まる場所があればいいが、なければのことを考えなくてはならない。いつそ野宿も考えた。寝袋を持つてくれば良かったと思つた。

電車の窓は山間の風景に移り変わり、思い出の山らしきところの、それも観光地の様子が窺える駅に下車した。わりと新しい建物が多くこざつぱりした街並みである。歩いてすぐに川を見つけて川沿いを上流の方へ歩いて行つた。緩やかな坂が続く。近くの看板を見ると寺院がいくつかあるらしい。適当なお寺でも見てみようかと思つて入口まで行つてみるも、あまりにも殺風景ですぐにやめにした。

山に続く脇道を見つけて進む。一応人が通れるようだがあまり整備されていない感じがしない。やがて山道は険しくなつて、曲がりくねつて下つたり登つたりを繰り返す。長い山道を抜けると整備されたアスファルトの細道にたどり着く。山道を出たのはいいが周りは山ばかりが見え、方向がわからなくなつた。だが智博は戻ろうとはしなかつた。

荒れた畑跡が多く鬱蒼している。思い出の山はもつとこざっぱりとした感じだつた。今は感情が揺れることに飢えていて、それを求めるように歩き続けた。

黙々と歩き続け山頂付近まで来た。見下ろした街はうつすら曇つて見通しが良くない。近くの座れる所を探し、手頃な丸太に腰かける。湿つていて感触が良くなかつた。今のところ道に車は一台も通らないので安心できた。だが車は通らないが人が来た。智博より少し若い男性登つていく。智博に気づくと避けるような感じで通り過ぎた。しばらく智博はボーっと座っていると先ほどの通り過ぎた男性が引き返してきた。何か不自然なものを感じて、興味が湧いた。道を進んだ先には大規模に土砂崩れが起きていた。道が崖下に丸々落ちて無くなつている。立ち入り危険の看板とロープが張られて進むことができない。そして看板に花が添えられてあつた。途端智博はその花を見入つた。

花は心を表す手段になつている。思いを花に籠めることで形に表す。花の形を借りて現実世界に感情が現れる。智博は花に籠められた思いを探つてしまった。嫌でもここで起こつたことを想像してしまった。そこにしばらく立ちすくんだ。そこへ一人の女性がやってきた。いつの間にか近くに車が止まつている。彼女は花を携えていた。智博に会釈して花を添え、手を合わせて祈る。なんだか居心地が悪くなつて堪られずにその場を後にした。

儚い、何とも儚い。智博の心は沈んだ。とぼとぼ道を引き返していく。今日もまたどこまでも歩いた。足にタコができるまで歩こうと思つた。昼飯をとることを忘れていると日が暮れ始めて、風が心

地よく冷たくなる。ビジネスホテルを探すも都合よく見つからない。やはり、人の多く集まりそうなところに行かないといけない。駅を見つけたが案内板を見たところ近くに民宿やホテルはない。駅前の交番でホテルを聞くと二つ先の駅にたくさんあるということなのでそこに向かった。

二つ先の駅前はそれなりに人がいた。大きな通りが線路と平行しており、そこにホテルがいくつか看板を出している。大通りから枝分かれするように飲み屋の多そうな路次がのびる。少し嫌な感じがして駅の反対側に行った。往々にして片方側の街並みが栄えればもう片方側の街並みは落ち着いている。予想通りに街並みは落ち着いているし、運良く手ごろなホテルもとれた。チェックインをしてすぐに外に出た。適当な飲み屋に入ってカウンターで一人飲みをした。ざわめきの中にいる時の方が気持ちを安定させた。そして一人を充実させる。

チビチビと飲んでいると近くにいたサラリーマンの客の話が耳に入る。

「また、食品偽装があったらしいな。」

「本当かよ。最近多いな。」

「多い。どうなってんだよ。」

「今回ばれたのって大手だろ。大手の奴らは優秀なんじゃねえのかよ。」

「お役所仕事になってんじゃねえの。」

「世の中嘘だらけだ。」

そんなことを憂さ晴らしのように話していた。智博の会社が食品会社だけに興味があつた。しばらく聞き耳をたてていると彼らの話はあらぬところへ広がっていき愚痴り合いになっていった。智博は彼らの愚痴を余すことなく聞いた。

いい具合にほろ酔い加減で腹を満たしたところで店を出た。智博は深酒しない主義である。火照った体を覚ましながら、ホテルまで歩いて戻る。ホテルの部屋は四階にあり、窓からの風景がなかなか

いい。こういう些細なことにかすかな感動を見つけられずにはいられない。

電源を切っていた携帯を取り出し、電源を入れる。こういう時に限って着信は誰からもない。虚しくなつて何かやることをひねり出そうと考えると以前、固定電話にかかつて居留守を使ったことを思い出した。いまさらながら、お詫びを兼ねて連絡してみようと思うが、踏み出せないでいる。自分がじれったくなつて携帯を放り投げた。スプリングの利いたベッドに寝そべる。違和感がする。ここまでの自分は違和感だらけなのでその違和感でまぎれてほしいと思つた。

次の日、寝る前はもつと山を探ってみようと思つていたが朝起きると行く気が失せた。どうしようか迷つてふらふらした。駅前をぶらついたのち実家に戻ることにした。振り返ると旅行とも言えない遠出だつた。

まっすぐ実家を戻ると昔の小説本をあさつた。押し入れの中の少しくたびれた段ボールを開ける。瑞貴に勧められた本がいくつかあつて、ぱらぱら開いて見る。あの頃の繊細な感受性が思い出される。あの頃は未熟な考えをしていたが情熱があつた。さらにノートを見つけて取り出した。日記だつた。日記と題は付いているが、エッセイや詩も乱雑に書いていた。若い、今でも若いうちと思つていいるのだが、より若くて未熟だ。しかし、妙に力強い。見ていいる不思議だつた。今の自分を納得させる部分とまだまだ甘い論調が混同していいるのだから。読み続けると次々にその時の思い出、考えが頭に浮かぶ。今考え直すとまた新たな違う面が見えるのも面白い。

日記にこんなことを書いていた。

―六月二十一日

誰もが持つていいる狂気に振り回されて理性は失つていいる。偽りの理性が横行して常識が常識を保てない。モラル？マナー？正義？悪？所詮は多数決？洗脳したもの勝ち？俺はどこに根をはればいい。

瑞貴が出来過ぎているから嫉妬しているのか。後ろ向きな発想ばかりする自分が悔しい。そもそも嫉妬している時点でダメなのだから嫉妬とは思いたくないのだが、それを振り払うように前に進むしかない。

―七月三日

今日は暑かった。体の弱い瑞貴は今日は休みだった。あいつは大変だ。その点自分は健康で幸せだ。俺だけが幸せなのではない。案外にそれに気づけないものなのだ。気づけない、だから俺は幸せを感じる事が少ないのかな。

日記を閉じた。なんだか恥ずかしい。そしてあの頃からすでに病んでいた。日記を書いた時から成長しているのか、と思えるくらいなかには鋭い考えがあったように思えた。また今度読んでみよう日記は机の上に置いた。

夜になって、急に強気になった。以前電話をくれた大学の友達に携帯電話から電話をした。名前は堺。

「もしもし。」

電話ごしの堺の声は低く、不機嫌のように聞こえる。若干気負いました。実際はそうではなかった。

「堺？俺、智博。久しぶり。前は電話出られなくて悪かった。」

「おお、久しぶり、いいよいいよ。」

明るい声が智博を安心させた。

「どうってことはないけどさ、どうしているかなと思ってさ。」

「元気じゃねえなあ。もう辛いわあ。」

「そうか、お前もか、人生辛いなあ。」

社交辞令ではない。

「この前の電話なんか用事あった？」

「ああそうだ。お前聞いたか？坂本のこと？」

「何の話？」

坂本は大学時代の共通の友達だ。智博と坂本は、高校は違ったが

中学校は一緒だった昔馴染みでもある。

「坂本自殺未遂したってよ。」

「自殺？」

智博は急に心拍数が上がった。途端言葉に詰まった。

「智博？」

「…本当か？ビビるって。」

「マジで。俺病院に見舞いに行ってきたらさ。相当ヤバそうだったから思わずお前に電話した。」

「そうか、俺も見舞行ってみるよ。」

「そうしてやってくれよ。」

それからそれぞれの状況を軽く話した。

「わかった。じゃあ堺、今度飲もうな。辛過ぎてお前まで自殺未遂されちゃあ悲しすぎるから、愚痴聞いてやるよ。」

「お前に人のことがいえるのか？」

悔しいが少しドキツとした。

「でも俺もお前と久々に会ってみたいから今度飲もう。来週あたりにさ。」

「ああ楽しみにしてる。」

「うんわかった。またな。」

堺と話して妙に安心した部分と坂本のことが心配な部分があった。静かになった部屋は寂しい。テレビを点けて余っている時間と寂しさを紛らわした。

布団の上に座って壁にもたれながら坂本のことを思い浮かべる。

坂本はマジメな性格で人あたりもいいなかなかできた奴だ。特別親しくはないが嫌な友達ではない。昔の中学の頃はクラスは別々だったがおとなしい感じはしていた。大学時代は明るくなり、心配することは何もないように思っていた。何が彼を自殺に駆り立てたのか想像できなかった。

病室

次の日の土曜日、早速坂本の見舞いに行くことにした。あらかじめ坂本が入院している病院を聞いていた。実家に近くよく知った病院ですぐ行ける。朝、念のため坂本の実家に電話で連絡しておいたのだが、その際、親御さんの話の端に「申し訳ない」といったニュアンスが含まれていることに気づいた。何かそれは違う気がした。自殺がすべからく悪者になっている。自殺が悪いのではないのではないか、と智博は思った。知らず知らず智博は坂本をかばっていた。少し寒かったので丈の長い薄手のコートを着る。なるべくシヤープなイメージで昔の俺とは違うことをアピールしたかった。つまらない見栄だった。

実家に置きっぱなしだった昔乗っていた自転車で病院に向かう。古いさびれた自転車に跨ってはシヤープなイメージも型なしだったがそこは気にしないことにした。その病院を見上げると灰色の壁の古い七階立ての建物が見える。この病院はいつか自分が骨折した時に行ったきりだ。今も昔も見上げた風景は独特の雰囲気为重々しい中に入ってインフォメーションで部屋を確認し、受付を済ませた。一階には大分人がいた。エレベーターで五階まで登って坂本の両親に聞いていた部屋番に行く。個人部屋だった。自殺未遂で入院となれば共同部屋では気まずいのだろう。厚いスライド式の扉の前から声をかけても意味がなさそうなので何も言わず扉を開ける。中は思ったより狭くベッドの周りにカーテンが張られていた。全く音がしない。

「坂本？」

静まりかえった雰囲気にとまらず声をかける。何も反応がない。智博は心細くなって立ちすくんだ。坂本の反応を待っていたが一向に返事はなかった。すると、後ろの扉が開いた。振り返るとそこに面喰らったように驚いている坂本がいた。

「智博、か…」

パジャマ姿で髪が長くなった、かつての面影を消した友人がいた。いくら見た目が変わろうと坂本とわかるのは不思議だった。

「驚いた。お前すっかり変わったな。」

スリッパをパタパタ鳴らせて近寄ってくる。坂本の見た感じは意外と元気そうだった。ちゃんと話になるなと思った。

「変わったのは見た目だけだろ。お前も変わっているぞ。それより何でカーテン閉めていたんだ？俺てつきり中にいるのかと思った。」

まあいいじゃねえか、と言ったような表情だけをして言葉は返さなかった。そして坂本はゆっくりとカーテンを開けてベッドに座った。智博は近くにあった丸椅子に座った。

「で、大丈夫なのか。」

「お前も励ましに来たのか。死にきれなかったことでは大丈夫じゃない。肉体的にはもう問題はないよ。」

「死ねなかったのが残念なのか。」

「冗談だ。」

言っておきながら坂本は苦笑いする。智博は苦笑いすらできなかった。

「笑えねえ。」

「で、俺をどうしたいの？元気にさせてくれるのかよ。」

「冗談交じりの言い回し。意味深なニュアンスが含まれていることに智博は同情した。」

「そんなに気を使うなよ。俺はお前を責めたりはしないし、慰めたりもしないから。」

思わず坂本に言った。途端に空気が張りつめた感じがする。坂本の笑顔が凍りつく。智博は少しばかり意地の悪い笑みを返してやった。自分でも信じられない気持ちだった。坂本はそんな変な俺を感じとって真剣な顔をする。坂本は立って窓を開け外を眺める。風が入り冷たい。

「お前はそういう奴だったのか。」

「意外か？」

「いや。」

病人らしい顔になって坂本は振り返る。

「で、じゃあ、お前何しに来たんだ？」

気を使わない棘のある言い方に聞こえた。見た目だけでなく雰囲気までも昔の坂本の印象ではなくなつた。彼の奥行の先にある本音には距離があるように思えて、それを催促はできそうもない。本音を出さない坂本でも何もしゃべらない坂本でも、会つてみたかつた、それだけだつた。

「お前がどうなつているか見たかつた。」

「暇なんだな。」

「お前よりも暇じゃないと思うぜ。」

「それもそうか？ いや、似たようなもんだろ。そう見えるだけかも知れないだろ。俺もお前も。」

「お前は大変なんだろう。」

「どうかな。自分じゃ答えられない。」

「だから大変なんじゃないか、とも言えるような気がするな。」

話が途切れた。

さて、どう切り出そうかと思つていたが坂本が話を振つてくれた。

「何で俺に会つてみたかつたんだ。」

「俺もいろいろあつたからな。お前もいろいろあつたんだろ、少しは気の合う話をできるかも知れないと思つたからさ。」

「類は友を呼ぶか？ 俺の何がわかるんだ？」

「まあ落ちつけよ。俺にもいろいろあつたつて言つただろ。そう突っかかるな。それにただ話ができればいいのさ。」

坂本はかすかにシユンとした表情をしたかに見えた、が、強がつているのかすぐに厳しい表情に変わる。敵じゃないんだからそうそう身構えないでくれと智博は心の中で呟いた。

「俺お前に喋つたことあるよな？ 俺の高校の時の友達が死んだつてこと。」

坂本は首を縦に振った。

「ついこの間にそいつの墓参り行ってきた。俺はそいつのことは唯一無二の親友だと思っている。だからさ、生きる、死ぬに関して敏感になっているんだ。」

「そいつが羨ましいなあ、俺にはそんな思ってくれる友達はいない。」

智博は刹那的にムツとしてつい言い返す。

「そう簡単に羨ましいとか言っなよ。」

坂本は少し驚いた。それを見て智博は自重する。

「悪い、俺はそいつのことが羨ましいと思ったことがないんだ。」

「なんで？」

「そいつの人生が残したものがあまりにも小さいから。」

風が室内をざわつかせる。

「お前を見る限りそうには見えないけどな。」

そう言われて智博は少し戸惑う。

「お前の親友の話、前に聞いた感じだとお前にたくさんものを残したんだなって思ったけど。」

その言い返しは効果的だった。

「それは…そうかも知れない。それは間違いではない。」

「何かを残すだなんてそんな大層なことだったことないな、俺は。」

智博は腑に落ちなかった。それを知ってか知らずか間髪いれず坂本は言う。

「まあ落ちつけよ。お前にもいろいろあつたんだろ。」

坂本はにやりと笑った。

智博少し考え込むと、閉鎖的な力を持った自我の塊が強烈に膨大してきたようだ。だが智博はそれに抗えず、また躊躇するような繊細さはなかった。

二人は相手の出方を探った。埒が明かないので話を切り出したかったがどちらもなかなか譲らなかった。

「さて、どうしようか？」

坂本がたまらず聞く。

「お前から話しなよ。」

智博が促す。

「ふっかけて来たのはお前だろ。お前から話せよ。」

まあそうか、と智博は思った。

「わかった。でもお前もいろいろ後で教えろよ。」

聞いてやると言わんばかりに坂本は頷いて気楽な表情に戻した。智博はやれやれと思いつつ頭の中を整理し始めた。思い出すたびに心が乱される。それを確認しては落ち着かせようと極力努力する。

「さて、昔話からでも始めるか。」

智博は瑞貴のことを事細かに話した。その話は悲痛な程の思い入れを込める。彼の優しさ、聡明さ、慎ましさ、そして不可解さをも説明した。墓参りの心情と瑞貴からの手紙から受けた切なさまでも……。

話ながら確かに坂本に言われたように、瑞貴からは多大な影響を受けているし、それは彼の残したもののだな、と感じていた。

「瑞貴は俺を変えたのかも知れない、でもあいつならばもっと偉大なことをしでかすはずだった。少なくともその資質は持っている俺は今でも思っている。」

そして、不遇にも病によって亡くなったことを話した。

「瑞貴の母親に聞いたところ『智博は常に前を向いている』と言って、瑞貴は俺を羨ましいと思っていたらしい。さらには遺書の手紙にはこうも書かれていてさ、『俺は生けていける智博が羨ましい。智博の人生は俺が羨ましんでいるよ』って。俺はそれが信じられなくていろいろ考えたんだけど、よくわからない。俺は俺の人生を羨ましいとは思わないから。」

瑞貴の話はそれ位にして智博は自分の不甲斐無さを語り始めた。自分を制御できない静かな負の感情に振り回されていることを。もう一人の自分のことも事細かに話した。

「俺は社会の中で、会社と社会全体に苛立ちと疑問で精神を保てな

くなっている。そんなものだから俺は最近、幻覚と言っても差支えはないくらいのおかしな夢を見るんだ。それはもう一人の俺が出てきて何かを訴えてくるんだけど内容は何かわからない、というものなんだ。そいつは紛れなく俺自身なのは、なぜか確信を持って言える。俺とそいつどっちも本物で俺には変わりない。そいつも俺なんだ。でも何で今の俺がこうしているのか不思議でならない時があつて、いつ逆転してくれるのか不安で不安で嫌気がさしている。」

坂本は状況がいまいち理解できていないようだ。だがそれが正しい。たとえ本当のことでも、作り話としても、このようなおかしな話をマジメにされてもその話し手を疑うだけだ。誰でも嘘をつく術を持っているわけで、後は信用するか、しないかである。智博は信用されなくとも一向に構わない。かえってその方が後々面倒にはならないような気がする。

「二重人格とまではいかない、けども心の底から滾る自分の理性外からの囁きに俺は惑わされている。わかるかい？この恐怖が？自分が信じられなくなる不安が？」お前は狂っている、おかしい』と言いたければ言ってもいい…

お前は俺をどう思う？」

急にふられて坂本は少し考え込んだ。

「よくわからない。わかりそうでもない、そんな感じだ。

…そう言えばお前さっき俺に責めたり、慰めたりしない、とか言っていたな。今お前の話を聞いて何となくその言い分がわかるような気がする。

実はお前、自分がどんな状況なのかよく本当はわかってるんじゃないか。俺に理解してほしいと思いつつ、怖くて、怖くて遠回しになっている。そう守りに入るなよ。隠さないでもっと本当のことを言えよ。そうじゃなくちゃ俺はわからないままだよ。

はつきり言つと、なんでもっとはつきり言わないんだって俺は思うね。」

だまそうとか試そうとは思っていない。つい防御的になってしま

っているのかもしれない。坂本はこの程度のことでは納得しなかったことが智博はかすか嬉しかった。

「そうか、俺は自分で気づいているのか。でもどうだろう俺は迷ったままだ。説明できる気がしない。」

「それは自分を受け入れてないからだ。何もかも。そう、もう一人のお前も。」

「それはできそうにない。受け入れたら俺が俺でなくなる。もう一人の俺にやられてしまう。」

「何を恐れているんだ。受け入れるしかないだろう。受け入れなければ何も始まらないぞ。」

「受け入れたくない。」

「なぜ。」

「…」

智博の中で背中合わせの悪魔を感じた。言葉が詰まる。しかし、

背中から体の中に入ってくる悪魔が自分を促したように言葉が出る。「理想は儚くて、自分の心を苦しめる。俺の本心は理想とはかけ離れているらしい。俺は瑞貴のようになりたかった。でも彼とは全く違う。何が違う？何から何まですべてが違う。俺は万人の中の一人、瑞貴は万人の中から抜け出して隠れながら万人を眺めている奴だ。多大な才能を持ちながら、決して俺たちの群れに近寄らず、かといって離れ過ぎず。あいつは一体何がしたかったのがよくわからない。」

「でもお前は彼を羨ましいと思ったんだろ。」

「そうさ、でも追い続けてもそれに反発する力が自分の中で働いてしまう。今じゃあ彼の後ろ姿は遠く果てに行ってしまったって何を目指せばいいか、わからなくなってしまったみたいだ。」

「ちよつと違うと俺は思うけど。」

「何が。」

「お前は『常に前を向いている』って言われたんだろ。俺も大学の時はお前を確かにそんな感じに思っていた。でも今はどうだ？俺は

過去という『後ろにしか向いていない。』ように感じる。」

「それはたまたま目指しているところが過去だったただけでは。」

「違うんじゃないか。別に過去を目指したって目指すことには変わりはないけど、今を踏まえてない。縛られているだけなんじゃないかと思う。」

「俺が？そんな馬鹿な。」

「そもそも、お前のもう一人のお前は悪なのか？お前はそいつを本心だと思っているんだろ。なんで嫌がる？お前は偽りの自分のままでこれからも偽りを重ねて生きていくつもりなのか？それを俺は決して勧めはしないぞ。」

智博は何も言えなくなつた。ここまで言われるとは思っていなかったからだ。その坂本の見解は智博に衝撃を与え、自分が遅れをとった気持ちに襲われる。

「お前は何を怖れているんだ？まるで自分を制限しているようにすら見えるぞ。」

「俺の望む道には必要なことだと思った。」

「そうか、でも安直に感じる。何かがお前の重荷になっている。きっとそれが自分を縛っている風に俺には見えるんだ。」

「怖れているのは夢に出てくるもう一人の自分だ。」

「何か違うと思う。それは結果だ。そのもう一人のお前が出てくるに至ったその原因こそ本当の怖れていることじゃないのか。結果は否定できないし、しても意味がない。俺はそう思うなあ。」

智博ははつきりとした答えを返すことはできなかった。そんなに自分は物わかりが良くないし、自分のがちがちに固めた固定概念は簡単に崩せるものではなかった。よって受け入れることは容易ではない。かと言って頭ごなしに否定しては自分の醜態を晒すだけである。それはどうしても避けたい。ただ黙るしかなかった。

「ここでお前のことを何が正しい、何が間違いなんて議論したってきつと意味ないだろう。最終的にはお前が出す答えで、ただ俺がそう思ったことを伝えたに過ぎないから。でも少しは参考にしてくれ

よ。」

そう言ってあまり意地悪なことは突っ込んでこなかった。また、続けてこうも言う。

「それから、な、その苦しみを話してくれたことに関してはすごく嬉しい。なかなか話せないもんね。俺もお前も誰しも。」

坂本はだんだん寂しそうな顔になった。

「今度は俺の番だな……」

そう言っただけ、組んだ手を見つめたままなかなか坂本は話そうとはしなかった。ためらっているらしい。先ほど智博は言い返すことができなかったこともあり、言葉をかけにくい。妙に静かな空気が漂う。智博はひたすら待った。

ひたすら長い時間が二人を襲う。

ようやく坂本がしゃべり出す。

「俺が死のうと思ったことは俺の弱さが原因だ。他人から見ればほんの些細なことも知れない。」

智博は前置きはいらなと思ったがそれ知らない坂本でもない。つまりはそれだけ告白することに抵抗があつて、何とかその抵抗を和らげようとしているのだと智博は解釈する。黙って聞いた。

「俺は人間が嫌いになった。俺は人間の群れの中で生きてはいけない。」

直感的に智博は少しわかる気がした。

「人間は成長するものだろう？俺は子どもの頃から大人は凄いものだと思っていた。確かに凄い人もいる、技術だったり、能力であったり、ある一面のスペシャリストは大勢いる。でもムラがあり過ぎる。そこに歪みが生じている。総合的にできた人もいれば、交渉術にばかり長けた人もいるし、猛烈に負けず嫌いなだけの人もいる。人間は一人では生きていけないから、そこいら中で必ずぶつかる。俺は大人達は凄い奴らだからぶつかるうとも相互理解できるものだと思っていた。でも全然うまくことは進まない。まるでみんなで苦しめ合っているようだ。子どもの頃はそうであつてもしょうがない

俺は思っていたけど大人になっても続いているとは思ってもなかった。人は十人十色というくらいだから、同じ人間はいないし、だから面白いともいうけど、その中にはどうしようもないダメな奴も含んでいるし、ちょっとだけダメな奴も、一面だけダメな奴もいる。そんなものだから、どこかで必ずぶつかりあつてそのたび我慢して、一体何のために我慢するんだ？不幸な思いをしないために人は成長し、教育によつて磨かれるはずだろう？でも効果は現れているかい？中には俺が思っていた凄い奴はいる。でもすべてが凄い奴じゃない。凄い奴じゃない奴らが足を引っ張りあう。俺は人間の性質の底は子どもの頃から変わらないと感じている。そこから凄い奴に成長できるか、できないか、だ。凄い奴らでない者を憎いわけじゃない。元々人間の性質の底はとも醜い考えで酷く身勝手なことに失望したんだ。そして俺は決定的な自分の愚かさを悟った。」

「それは？」

「それは大きな出来事ではないよ。休日にとくさんの人が歩道を歩いている風景を見て俺は舌打ちをしたんだ。子ども連れの親子が広がって歩いていたし、おばちゃんたちがたらたら歩いている。それは俺にとって邪魔でひどく癪にさわった。ただそれだけのことだった。俺は以前はそんな些細なことでは苛立つたりしない。でもその時は簡単に苛立つてしまった。いろんな要素がからんでいるにせよ、俺はこんな自分が突然嫌になった。一気に何かが溢れだして鬱が止まらなくなつて、俺という人間がどうしようもなく嫌になった。そして、服役自殺は試みた。でもどうだ、死ぬ覚悟なんてないし、いい加減な気持ちのまま死のうとした。だからいざ死のうとすると強烈な生きる本能にぶつかった。でも俺は引き返せないほど死へ近付いてしまった。そして、生死をさまよつた後に、今はこう生き永らえた。」

話はそこで区切られた。坂本は智博を見つめて言う。

「お前は俺の話を聞いてどう思った？」

笑いたければ笑えと言つた投げやりな質問ではない、救いを求め

たような質問だった。正直、智博はまるで世間話のように聞いている、理論的なことは考えてなかった。少し戸惑う。

「どう思ったと言われても、なんというか、切ないな。その理由はなかなかわかってもらえないだろう。」

「お前はわかるか？」

「微妙にわからない。」

率直に言ってやった。本当にわからなかったからだ。坂本は黙った。

「だいたいはわかるけど、今聞いたことは、やっぱり結果なんじゃないか。もつと根本的なことがあるんじゃないか？その部分をもつと話してくれよ。」

坂本が少し微笑んだ。

「そうだな。俺も話さないといけないな。根本のことはもつと些細なこと、本当に人が怖くなった。ただそれだけなんだ。どんな人を見ても俺は怯えてしまう。その理由つても人は些細なことで怒って簡単に人を傷つけてしまう怖れが満ち溢れていることに怖くなったんだ。だって、自分がそうだったから。最初はほんの小さなことだから、気にならなかった。でもそのうち大小は関係ないことに気づいた。そうならもう怖くて仕方がなくて俺はもう生きていけないと思ったほどだ。だから俺は自殺しようとした。」

坂本が怯えたような顔をした。

「じゃあ、もしかして俺も怖いのか？」

「ああもちろん、できれば本当は言いたくなかった。この本音を他人に話すことは並大抵のことじゃないから、まして怯えているからそれになんとか情けない。」

なんだか罰が悪い気になった。沈黙が走る。

「でも話せて良かった。」

坂本がそう言ってくれた。

「お互い様だよ。お前だって俺に話してくれたじゃないか。お世辞じゃなく、ちょっと話せて気が晴れたし。」

智博は話したことで楽になった。自分のことを告白するのも始めてであるし、やはり相当のことである。

「それで、また死にたいと思っているの？」

「それはないな。今は懲りている。死ぬ覚悟が出来そうもないし…。お前も簡単な気持ちで死のうと思うなよ。」

「お前からそう言われるとは心外だな。」

「変か？お前もそのケがあると思うただけだな。」

「冗談よせよ。」

問いかけて智博は少し複雑な心境になっていたが表に出さなかった。ほどほどに話し尽くして一瞬話することが無くなった。これからどうこう言い合おうという気は二人にはなかった。もう充分気力を使い果たしてしまっていた。智博は気を奮わせた。

「悩みが解決するわけじゃないけども、でも話せて、本当に、良かったと思う。」

同じことを言ったただだが、智博はそう締めくくりの言葉になった。坂本は頷いた。その言葉と同時に雰囲気 が和らいだ気がした。相変わらず風が入り込んでくる。

「ところでちよつと前に、堺が来ただろ。なんか言われたのか？」

「めっちゃめっちゃ励まされた。」

「あいつ、熱いからなあ。」

「熱すぎて困った、けどあれはあれで精一杯俺を思ってくれているから邪険にできないし、だから辛かった。本当に自分がみじめになった。でも不思議なものであんなに熱く言われると自分の単純な思考回路にするする入ってくる。やっぱり嬉しく思ったよ。一方のお前はずうずうしい奴だよ。いきなり中の中に土足で入りこんできやがった。悪趣味な奴だ。」

「そんなんじゃないよ。俺もお前のことを思ってたんだから。」

「どうだか、興味もあつたんじゃないか。」

「…少しね。」

「まだまだ、お前には余裕があるな。」

「ないよ。興味は望みだっただから。」

「望みは…ためになったかい？」

「望みは望みのままだなあ。」

「そうか…」

智博は何をしに来たのか自分で理解はしてなかったし、今もその意味は見いだせていない。あつたのはやるせない思いとほんの少しの慰め。

「これからどうするんだ。」

「何も考えていない。」

「まあ元気でいられように頑張れよ。」

「ああなるべくそうする。」

少し頼りないような顔をした。頼りなくて寂しい姿に見えた。その不安気な姿に智博の心は乱される。

「仕事はどうしてる？」

「辞めたよ。こんなこととして居続けられるほど図太くない。そのままいてもどうせクビだろうし。」

「じゃあ今は何もすることがないのか。」

「まあそうだな。」

「何か見つけないとお前の悪魔がまたあらわれるかもな。何か心を埋めれば、少しは楽になると思うんだ。」

「それでそれで違った感じに狂ってしまいそうだ。」

「狂ったくらいが俺たちにはちょうどいい。」

「そうかもな、俺達は元から狂っているから、裏の裏は表つてことで、さらに狂ってやつとまともになる。」

坂本が自虐的に笑った。智博はマジメに頷いた。また悲壮感が漂ってしまった。いよいよ話題も尽きたところだ。

「そろそろ帰るよ。」

智博は立ち上がる。

「そうか。じゃあまたな。」

「またな」その言葉を聞いて少し安心した。正直なところ、智博

は今が辛くて死に魅力を感じてしまっていた。だが似たような境遇の友がいるだけで、不謹慎ながら心強く思っていた。

外に出て病院を見上る。その巨大な建物の中の小さな一角に坂本はいる。実に小さい。だが彼の内に秘めた悪魔はどれだけ大きい存在なのだろうか。智博や坂本だけに限らず、人それぞれに悪魔が棲みついていると思えば世の中は本当に居心地が悪いし、恐ろしい。だが自分に精一杯でそれに構うことはない。ひとまず、今はそう思い至ったがなぜか悲しさが否めなかった。

一方の坂本は智博が帰った後に静かに涙を流していた。

架空の電話

実家に帰ると醤油の香りが立ち込めていた。智博はその匂いが好きだった。母親が昼食を作っている最中だった。父はリビングのいつものソファで新聞を読んでいる。すぐに昼食になると思ってからリビングの隣の和室で横になった。畳の匂いが懐かしい。大の字になって天井を見上げて板の木目を眺めていた。ぼんやりしていると嫌でも近い未来を思い浮かべてしまっていた。どんどん悲観的になって行く。活路が見出せない、迷子になったみたいだった。

その後、昼食なので呼ばれた。三人で囲む食卓は不思議な安心感がある。ふいに母が話を振る。

「さっきは自転車で行って来たの？」

「病院。坂本の見舞いに行ってきた。」

母の表情が一瞬曇った。どうやら彼の事情は知っているらしい。

「そう。」

母はあまり踏み込まなかった。父は表情を変えなかった。智博はそのポーカーフェイスが嫌に思えた。父が箸を止めてこれも唐突に聞く。

「秋久君、元気だったか？」

しらじらしく聞こえたが父らしい言い方だった。秋久は坂本の下の名前だ。

「どうだろう、俺には辛そうに見えたけど。」

飾ってやつたりせずに率直に言った。智博は詳しいことは流石に言えないと思いつつ、下手に氣遣って庇うように言うことは坂本を侮辱する気がした。

「励まして来たのか。」

「いや、特に励ましてりはしてない。」

「ちよつと冷たいんじゃない。」

母が口を挟んだ。智博は少し考えた。嘘は言っていないがフオロ

―しておかなければと思った。

「励ましても無駄だと思ったからね。」

これも嘘ではないがきつと冷たく思われてしまう言い方だった。案の定、母は少し不満そうな、残念そうな顔をした。父は相変わらず表情を変えない。会話は無くなった。智博は世間とのギャップを感じた。いつからだろうか、この世間とはかけ離れた異様な価値観を持つてしまったのは。思えば坂本も自分と同じギャップを抱えているのではないか。疎外感がまた気持ちを沈ませる。

昼食を終えると午後は部屋に閉じこもった。机の上の日記に目がいつて適当に開いてみる。

―十二月三日

今日は瑞貴が休んだ。あいつのいないと面白くない日になってしまつから不思議だ。彼の魅力はなんだろう。ちよつと考えてみようと思う。

―十二月六日

今日は雪が降った。世の中てんやわんやの騒ぎだ。だが話題になった。そんな話題でもクラスのコミュニケーションのネットワークが太く繋がっていく気がした。人と人を繋ぐことは些細なきっかけでいい。だがそこからが難しいのだろうと思う。繋がってしまった後はせめぎ合い。互いに一方通行。なぜ手をつなぐことができないのだろう。

思えばこの頃からすでに迷子になっているのでは？と思った。ただあの頃は瑞貴を道標にしていた。やはり当時のことと思うと複雑だ。日記を閉じた。長くこの日記を見ているとおかしくなりそうだった。でも手放せない。

それから昔に読んだ本を読んで時間を潰した。古くなった小さなテレビを見たりした。夕食は久しぶりに家族三人で外食した。照れくさくてかなわないが母が喜んでいる姿を見てしょうがないという

気持ちになった。

朝、アパートに戻るため早くに家を出た。出る間際大げさに見送られた。表情を変えない父が少し寂しげに見えた。そしていつもの真面目な顔でこう言う。

「いつでも帰ってこい。」

その一言が身に沁みる。途端に力が湧くものだから、まいる。

アパートに戻ると階段のところで住みついた猫がくつろいでいた。こちらを一瞥するとのそのそとアパートから離れていった。なかなかの図太い態度だ。自身の翳りなど全くなさそうな堂々とした様子に少し気押されそうな智博だった。部屋に入ると寂しい部屋だが、カーテンの閉め切った暗い部屋にもう一人の自分が潜んでいるように思えた。さて、これからどう彼と付き合っていくか、そう考えて部屋に入った。

それから六日経って次の土曜日。早速堺と居酒屋で会う約束をしていた。まだ日が落ちないうちにその場所に着いてしまった。後で連れが来ることを伝え、座敷タイプの個室に通される。待ち切れず先に軽く一杯飲み始めた。この一週間は何をやっても身が入らなくてあつという間に過ぎた。ここにいること自体おかしい感じがする位、意識が内面に集中している。つまりは悩んでいた。またどういうわけかもう一人の自分は出てこなくなった。

しばらくして堺が入ってきた。

「よっ、座敷とは思わなかったよ。」

堺はアクセサリーをジャラジャラ鳴らしながら座る。間髪入れずにビールが届く。入ったと同時に頼んだようで、智博はその手際と慣れっぷりに感心した。

「堺はよく飲み屋で飲んだりするの？」

「会社の付き合いで良く飲むからな。付き合いって言うっても同期との愚痴り合いだよ。」

「楽しい？」

「楽しい。何？智博は楽しくないの？」

「どちらかというと苦手かな。」

「勿体ないって、せっかく金払って飲んでいるんだから。」

そう言われればそうだろうが、そうそううまく割り切れるものではない。もしそれができれば楽だろう。楽だが怖い。

酒とつまみをどんどん口に入れていく堺を見ながら智博は漬物をちまちま食べた。堺は仕事のことからプライベートのことや昔の友達のことをいろいろと話した。智博はそれを淡泊な気持ちで聞いていた。

「坂本と会ったんだって？」

ついに話してきたかと思ひながら智博は堺のその言葉を返す。

「ああ。」

「坂本から電話があったから。もう退院しているぜ。」

「へえ…これからあいつはどうするんだろっなあ。」

流石に堺も言いにくそうになった。

「わからねえよ。本人だってわからないと思うよ。あいつのこれらを考えると辛いよ。本当に辛いのはこれからだろうな。」

智博は共感して頷いた。

「そういえば坂本はお前のこと心配しているようだった。」

「俺を？」

「遠まわしにそんな感じだった。直接口にしなかったけどな。」

俺のことを心配している場合かと智博は苦笑いしたが有難い気持ちには湧いた。

「お前も大変なんだって。」

「坂本ほどじゃないよ。」

それから坂本に話したことを端折りながら大事なところは面倒なので伏せて大雑把に話した。

「こつちが話したらあいつもいろいろ話してくれた。」

「へえ、俺が言った時は元氣なく笑っていただけだったけど。」

「でも坂本はお前から励まされて喜んでいたぞ。俺が会いに行った

時はお前が励ましてくれた後つてこともあつて余裕ができたんじゃないか。」

フオローはしたがたぶんそれだけの理由ではないことを堺は知つてか知らずか何も言わなかった。

それから智博と堺と坂本との昔話を始めた。あの頃はそれなりに楽しかったなあと思ひ出に浸る。

「智博はなんか楽しいことあつたか？」

堺が聞いてきた問いに智博は言葉が詰まる。

「つまらないことばかりだよ。楽しいことなんてないに等しい。」

「坂本は俺とお前と話せて楽しかつたつて言つていたぜ。」

智博は意外に思つた。智博にはそう思うことすらできやしなかつた。

「お前はあいつと話してどうだつた。」

「どうだろう、楽しかつたと思う。」

はつきりしない言い方だが堺は気にせずに続けた。

「今はどうよ。楽しいだろ。」

堺は憎らしい笑みを浮かべているが不思議と嫌じゃない。

「ああ楽しいよ。」

そついうと瓶ビールを掲げて勧めてきた。

堺はまるで何も気負わずに話してくるのが清々しい。堺の魅力を知つた氣になつた。その後もいろいろと話した。噂話や愚痴やくだらな話、どれも些細なことだつた。しかしどの話も智博を退屈にはさせなかつた。智博は楽しいことをようやく知つた氣になつた。

深夜まで飲み明かした。

少し飲み過ぎたやうでアパートに帰る足取りが覺束無い。やつとアパートまで着くとすぐに眠たくなつた。瞼がだんだんと閉じていく。幸せな氣持ちになつていく。

そしてまた、夢を見た。昔の夢だつた。

瑞貴と一緒に下校の道を歩いていて。いつものように思ひだけが伝

わってくる。優しくて居心地のいい感じがする。だが彼は霧のように消えていった。悲しいが消えていく中彼は笑顔だった。智博はそれを見て「さよなら」と言えた気になった。夢はそれだけだった。起きたら不思議に爽快だった。

悩みは悩みのままだった。しかし、悩みと思わなくなった。どんな納得できないことがあってもそれを否定することはなくなった。机に向かって、実家から持ってきた日記にこう書き足した。

― 六月七日

種はどこにどう時かれたのかは俺にはわからない。どう花を咲かせ実をつけるかは結果論だ。俺はどこかで間違えた。枯れた木々を一生懸命手入れして、満足していたようだ。一体俺は何をしてきたのだろう。あせらずに自分のできることから一つずつ始めよう。

ペンを置いた。これからなんて何もわからない。変わるかもしれない。しかし、今のままではいけない。

やはり何も手につかない日が続いた。思考がまとまらない。昔の思い出ばかりが鮮明だった。

もう一人の自分がたびたび現れるが彼の言葉は智博になかなか届かない。まるで心のない人形になってしまったように彼に恐怖すら感じない。変わりに親しみを覚えた。

今は夜十一時。眠っているのか、起きているのかわからない時間をベットの上で過ごしていると、携帯電話の耳障りな着信音が現実に引き戻してくれた。登録されていない電話番号だった。億劫だった。仰向けに寝たまま電話に出る。

「もしもし。」

「・・・」

「もしもし？」

「・・・」

いたずら電話か間違い電話か…ただただ億劫だった。通話を切る

うかな、と思った時に声が聞こえた。

「・・・智博。」

「坂本か？」

声でそう判断した。

「俺はもうダメだ。」

「なんで俺に言う。」

ぶっきらぼうに言い放った。

「お前ならわかってもらえるだろう。」

「わからないよ。俺は自分のことで精いっぱいだよ。」

「俺はもう死ぬしかない。」

智博の話は耳に届いていない。

「俺は俺自身に殺されるんだ。もう俺は自分を保てない。強烈に膨れ上がった、俺の自我が俺を襲う。誰も助けてはくれない。俺の本能はもう立ち向かえない。」

智博は黙っていた。坂本が延々と意味深に話す。彼はもう智博を認識していなかった。

しばらくたって、坂本が落ち着いたところを見計らって智博が言う。

「我儘に生きろよ。」

考えて出た言葉ではなく、咄嗟に出た言葉だった。

「俺は坂本を助けられない。坂本だって俺を助けられないはずさ。その膨れ上がった自我に襲われるなら、それより大きい我儘な欲望を持つてもいいじゃないか。迷惑をかけたってしょうがないさ。俺は死なれるよりは迷惑とは思わない。」

ふと、異様な沈黙が漂う。

「坂本？」

「・・・」

「お前誰だ。」

「我儘を貫いて生きていけるなら、そうしたかった。」

彼の口調は過去形だった。

いつもの夢。

坂本に電話をかけても電話は繋がらなかった。

翌日早朝、智博は瑞貴の墓の前にいた。

霧雨が辺りを包んでいる中、ビニール傘を肩にかけて、両拳を両足の横に握って墓石を見つめていた。

少しわかった気がした。

誰にも迷惑はかけないで生きることができないことは承知していた。瑞貴も我儘を言いたかったはずだ。彼の悲劇は我儘を言えない病の存在だったことかもしれない。彼に唐突にそのような試練が襲ったことがつらい。

「俺はお前のことを忘れない。でも俺はもう惑わされない。」

智博はそう墓石に残した。

いつまでもまとまりつく雨が不快だった。

その日、めずらしく智博は仮病を使って会社を休んだ。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8418q/>

虚像の影

2011年3月12日12時10分発行